

戦争と平和の資料館

ピースあいちニュース

第25号

2017年4月1日発行

〒465-0091
愛知県名古屋市長区
よもぎ台2丁目820
電話・FAX 052-602-4222



発行:戦争と平和の資料館ピースあいち

<http://peace-aichi.com/>

【定価:30円】

「ピースあいち」が10周年を迎えます!

日本の最後の戦争が終わって71年が過ぎました。あの戦争は遠いものとなり、人々の記憶も失われようとしています。そして昨今の政治状況は、またもや戦争の影が忍び寄ってくる気配を感じさせます。

「戦争と平和の資料館 ピースあいち」は、2007年5月4日に開館し、今年、10周年を迎えます。この間、次世代への戦争体験や記憶の伝承を中心に、平和を考えるための多様な活動を展開してきました。また、この10年間、行政や特定の政党、特定の団体に頼ることなく、すべてを市民のボランティアの手で運営してきました。お陰様で、10年間の「ピースあいち」の活動は社会的な支持を得て、しばしばメディアでも取り上げら

館長 野間 美喜子

れ、昨今は学校や地域から、また遠隔地からの来館も増えてきました。

開館以来、温かくご支援くださったすべての方から心から感謝申し上げます。

「ピースあいち」は、10周年を迎えるにあたり、これまでの活動を振り返り、次なる10年を展望して、多くの企画を準備しました。本号では、これらをご案内しています。10周年企画へのご協力・ご支援を、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



5月14日(日)、開館10周年記念式典等開催

5月4日に、「ピースあいち」は開館10周年を迎えます。多くの企画展や催し物が行われます。5月4日(木)の記念日には、無料開館を行います。

開館10周年記念式典は5月14日(日)に、「ピースあいち」で10時30分から行われます。安齋育郎さんが記念講演を行います。ボランティアの有志による朗読

もあります。

記念パーティーは、池下にある、ルブラ王山で12時30分から、会費3000円で行います。琉球音楽など出し物もあり、親睦と英気を養うための楽しい会です。

3階では「ピースあいち」10年の歴史がわかる「10年のあゆみ」展(4月11日~5月20日)を開催します。

『ピースあいち開館10周年記念誌』の発刊

1993年から始めた戦争資料館建設運動という「ピースあいち」の前史から、開館後10年のあゆみ、そしてこれからの活動に寄せる思いを掲載。ボランティアの座談会なども含め、興味深い読み物として編集しています。お楽しみに。

「私にとっての平和とは?」投稿募集

10周年記念事業の一つとして、「私にとっての平和とは?」というテーマで投稿募集をしています。文字数は一言から800字まで。募集期間は2017年12月31日まで。投稿は冊子にまとめて発表する予定です。詳しくは、ピースあいちのHPで。

特別企画 「ピエゾグラフによる いわさきちひろ展

—世界中の子どもみんなに平和としあわせを—

7月18日(火)~8月31日(木) 3階展示室 入場料/大人500円・小中高生200円(入館料含む)

詳しくはHPで。ご期待ください!

「福島の今・写真展」 「震災と戦争展～新聞に見る戦時中の大震災と今～」

3月7日(火)～4月29日(土) プチギャラリー

3月11日、東日本大震災・福島第一原発大事故から6年。いまだ進まない復興、放射能被ばくの中で暮らす住民たち。この3月末で、ほとんどの地域が避難解除される福島原発周辺地域の現状を知ってもらう写真展です。

戦時中私たちの地域を襲った大地

震「東南海地震」(1944・12・7)と「三河地震」(1945・1・13)による死者は5000人余、全壊家屋2万戸超でした。これらの地震と、記憶に新しい東日本大震災と熊本地震などについての新聞記事も展示します。



名古屋城が炎上した5月 —『名古屋大空襲』展

4月11日(火)～5月20日(土) 3階展示室

名古屋市交通局のマスコット・キャラクターも、地元のプロサッカーチームも…名古屋城の金鯱(きんしゃち)は名古屋の街の押しも押されぬシンボルです。金鯱をいただく天守閣は名古屋市民の自慢のタネです。その金鯱も天守閣も、江戸幕府が倒れると、「無用の長物」とされ、取り壊されそうになりました。そのあと軍隊の拠点となり、天皇家の離宮となり、ようやく名古屋市の財産になったかと思えば、戦争末期の空襲で灰燼に帰し、痛手から息を吹き返してようやく再建されると、祝賀のセレモニーは伊勢湾台風で吹っ飛んでしまいました。このような波乱に満ちた名古屋城の近代のあゆみを、空襲に焦点をあてながらたどってみましょう。



1945年5月15日の 1945年5月16日の
中日新聞 中日新聞



1945年5月15日の空襲で炎上する名古屋城(撮影:東海軍管区司令部報道部軍属・岩田一郎)

●関連イベント会 *入館料のみで参加できます。
講演「語られなかった名古屋城 波乱に満ちたその近代史」
4月15日(土)14:00～15:00/1階交流のひろば
西形久司さん(東海高校教員)

知られざる沖縄の真実—ハンセン病患者の沖縄戦

5月30日(火)～7月1日(土) 3階展示室

沖縄県名護市にある国立療養所愛楽園の全面的な協力のもと、沖縄県のハンセン病患者に対する差別と偏見の歴史、とりわけ沖縄戦において受けた苦難の実態に焦点を当てました。ほとんどが国民に知らされてこなかったことばかりです。

また、ハンセン病の正確な情報を伝え、今なお残るハンセン病患者への差別や偏見がなぜ起きているかを、特に「らい予防法」と関連付けて解明します。隔離政策に反対であった愛知県甚目寺出身の医師小笠原登の生涯や、無らい県運動に積極的であった愛知県がハンセン病患者にどう対応してきたかについても取り上げます。

国立療養所愛楽園交流会館とその展示



丸木位里・俊「原爆の図」と市民が描いた「原爆の絵」

2月14日(火)～3月25日(土)

「ピースあいち」が開館10周年を迎える年の最初の記念行事として、「丸木位里・丸木俊原爆の図と市民が描いた原爆の絵展」が開催されました。有料企画でしたが多くの方々に来館いただきました。

原爆の図は全15作のなかの第1部《幽霊》(1950年)。愛知県ではおそらく1986年に愛知県美術館で行われた原爆の図展に来て以来31年ぶりとなりました。「ピースあいち」が原爆の図の展示会を行うようになってから5つ目の作品です。原爆の図のために描いたデッサン8点も展示され、原爆の図が誕生する過程をうかがうことができました。

この展示会では「市民が描いた原爆の絵」26点も展示されました。広島市民が、絵は素人でありながらも自分が体験したことを絵に描いたものです。

今回は、その絵が描かれた場所が爆心地からどれくらいの距離だったのかを示す地図と、「ピースあいち」スタッフが絵に描かれた場所を調べて、撮影してきた写真もそれぞれの絵に添えました。

過去に遠い所で起きたことだから名古屋では実感しにくく思われることを、できるだけ身近に感じられるようにしようという狙いでした。

展示期間中に「3.11」6周年を迎えました。ヒロシマから3.11に、原爆から原発に、過去から現在につながる核の脅威を思わざるを得ませんでした。



◀「原爆の図」展
第1部《幽霊》



市民が描いた▶
「原爆の絵」展

《関連イベント1》

丸木美術館・岡村幸宣学芸員による ギャラリートーク

2月18日(土)

丸木美術館・岡村幸宣学芸員によるギャラリートーク。先の戦争が終わった当時、連合軍の治世下、原爆のことは公表されませんでした。そうしたなかで丸木位里・俊夫妻は、原爆をどう表現するかを考えるようになっていきました。二人が考えたのは、「人間を描くこと」。一連の絵は、二人の共同制作ではなく、「共に闘う」という形で成り立っていると話されました。数多くの戦争画を紹介しながらの、説得力のある解説でした。

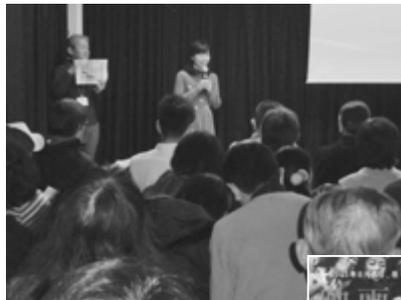


《関連イベント2》

映画『ひろしま』上映会

2月18日(土)・19日(日)

原作は、自らも被爆者であった長田新氏が編纂した文集『原爆の子～広島の子のうたったえ』(岩波書店、1951年)。日本教職員組合が映画化を決定、関川秀雄監督により1953年に製作された日本映画です。広島市の中学・高校と父母、教職員、一般市民など約8万5千人が手弁当のエキストラとして参加しました。一般公開の劇場が二の足を踏み海外で上映、ベルリン国際映画祭で長編映画賞を受賞しています。観客は2日間とも満席の盛況で、103人でした。



平和へのメッセージ

アメリカでは新政権が軍事力の強化を打ち出し、日本でも防衛予算を増やそうと言い出しています。世界の流れが火薬の臭いがする妙な方向へ動き出しています。

こんな時代だからこそ「平和の大切さ」を訴えなければなりません。5人の方に「平和への思い」を書いていただきました。

「無関心」は平和の大敵

安達 一葉
(あいち女性9条の会)

マザーテレサは、「愛の反対は無関心」と語りました。多くの日本人は、70年前の戦争の悪夢が繰り返されようとしている今日の政治に無関心。「ピースあいち」は過去を直視し、厳しい現実を目を覚まさせてくれる大切な場所です。

私に関わっている「あいち女性9条の会」は、今年1月、「ピースあいち」を会場に集いを開き、一昨年、「安保法制に反対する京都大学有志の会」のすばらしい声明文を起草された藤原辰史さんの講演会を開催しました。「戦争のない世界の作り方—まだ見ぬ自由と平和を考える」という表題で、民意で合法的に選ばれたヒトラーが独裁者になっていく道筋を語られました。そして「ヒトラー・ナチスは、私たちの心の中から生まれる」と警鐘を鳴らされました。また、有志の会の

ブックレットには、パレスチナの青年から「生まれたときから占領下の暴力しか知らない。日本は平和で自由の国、じゃあ教えてくれ、自由って、平和ってどんなものか?」と問われ、「もし知っていたら、沖縄が、今なお基地の存在で苦しむだろうか」と書かれていました。



私たちは、気がついた者の責任として、無関心な隣人に「平和は不断の努力でしか持続できない。民主主義って命の平等、それが1人1票の選挙、諦めずに投票に行こう」と語りかけ、非戦の輪を広げたいと思います。

「平和を守ろう!」と、声を上げよう

佐藤 るみ子
(中区九条の会)

父親がいつもいつも戦争の恐ろしさを語ってくれていた。熱田の「愛知時計」が空襲で被害にあった時のことを生々しく小さな子どもである私たちに毎晩のように。工場の広場に死体が足の踏み場もないくらいに並べられていたと。

人が大勢無差別に殺される戦争は絶対にゆるされることではない。しかし、国は国民を守るためとか、豊かな国にするためとか口実をつくって戦いを始める。日本の憲法第九条は二度と再び戦争しないと決めている。自分たちが殺されてもだ。10年ほど前の5月3日、憲法記念日の集会で井上ひさしさんが話された言葉が忘れられない。「9条を忠実に守っていたら日本は攻撃され、私たち日本人はみんな死んでしまう。そんなことになってもいいのか、と言う人がいるが、私はそれでもやむを得ないと思う。日本の国はなくなってしまうかもしれないが、こんなに立派な国があり、国民がい

たと、歴史に残るだろう」と。

自衛隊員を海外にまで派遣する法律が作られた。イラク派遣後、自殺した隊員が56人も出ているという。PTSDでだ。元自衛隊員が手記に書いている。「トラックで移動中、沿道にいる大勢の住民の中にキツイ目でらんでいる人がいた。銃で撃たれるかもしれないと思った。しかし、こちらから撃ってはいけない。殺されることを覚悟した」と。



本当の意味で九条が守られ、今の安保法制が廃止され、自由にもものが言えるよう「秘密保護法」が廃止され、「共謀罪法」を成立させないために、政治を変えないといけない。集会やデモなどでも意見表明して、平和を守りたいと思っている。

沖縄から日本の現在を観る

阪井 芳貴
(名古屋市立大学教授)

ちょっと前まで、「平和」に向き合う文章を書く自分を、想像したことさえありませんでした。大学で「平和論」という科目の担当者になることも、人生の想定外の出来事といっても過言ではありません。私にとって「平和」は当たり前にあるもので、あらためて考えることはなかったのです。同様に、戦争、差別、人権などなどについても、特段の関心を持って向き合ったことはありませんでした。いま日々接している学生たちと同じレベルでしたから、今の若者は…などと言う資格は私にはありません。

そんな私を根底から変えたのは、沖縄の住民になったという体験にほかなりません。それも、普天間飛行場のご近所に住んでしまったのですから、強烈です。

しかも、その時期に湾岸戦争が勃発し、即座に沖縄が最前線出撃基地と化したのを目の当たりにしたことは決定的でした。

人間は、物事の当事者にならないければ、その本質を理解することはできないと思います。「平和」についても、それが当たり前すぎると無関心に通り過ぎてしまう。でも、それが脅かされて初めてその意味を知るのではないのでしょうか?日本で最も平和が脅かされているのは沖縄であると感じます。沖縄から日本を観るひとつの視座が、平和の存在感だと思います。そのことを全ての日本国民に知ってほしいと、日々思っています。



世界に誇れる街を子どもたちの子どもたちの子どもたちへ

渋井 康弘
(名城大学教授)

愛知県は世界に誇れるモノづくりの地域です。戦時期、この地域には数多くの軍需工場がありました。モノづくりの優秀な人材や技術が軍事に応用・転用され、「モノづくり愛知」は「兵器づくり愛知」となっていたのです。愛知が東京に次ぐ激しい空爆にみまわれた理由の1つも、ここににあります。

戦後愛知の人々は、この地を再び「モノづくり愛知」として復興させました。愛知の戦後復興の歴史は、兵器づくりの拠点を平和産業の地につくり変えて行く、並々ならぬ努力の歴史だったとも言えます。

歴史から何を学び、そこからどんな教訓を引き出す

か——このことに真剣に取り組んでこそ、続く世代に希望のバトンを渡すことができます。それには過去の事実を直視する姿勢と、検証するための証拠保存が不可欠です。「ピースあいち」は、そうした作業を

民間人の手で行っている貴重なミュージアムです。しかも運営の多くは、ボランティアによって支えられています。この活動がいつまでも続くように、お力添え頂ければ幸いです。「モノづくり愛知」を後々の世代に笑顔で受け継いでもらうために。



「平和」という名の一本道を歩こう

斎藤 孝
(「ピースあいち」ボランティア)

戦後71年、この間日本は世界の戦争にまきこまれることはありませんでした。「平和憲法」と言われる「日本国憲法」のお陰です。米国では難民排斥を始めとする乱暴な言動の大統領が選ばれました。トランプ現象による乱気流が世界各国の外交・経済にどのような影響を及ぼすのか予測が付きません。日本に対しては米軍の沖縄駐留経費の全額負担や核武装化にまで言及しました。

一方、ヨーロッパでは国家間の戦争はないまでも「IS」(イスラム国)がイラク、シリアに勢力を伸ばし、各国では自爆攻撃が頻発しています。こうした中で旧ナチスを思わせるような右寄りの人々が声を上げるように

なり、フランスでは大統領選挙に候補者を立てる政党まで勢いを伸ばしています。

大戦後の日本は、「平和」という名の一本道を歩いてきました。しかし、集団的自衛権行使容認を閣議で決定し、安保法制関連法の公布に及んで、これまで「戦争をしない」と決めたこの国を「戦争ができる」国に変えました。平和の危機です。ここに来て私たちは二差路に出くわしました。右の道を行けば戦場に出合います。私たちは道を誤らず、平和の道を歩み続けたいものです。



第4回寄贈品展—市民から寄せられた300点—

2016年12月6日(火)～2017年1月14日(土)

展示品は2013年8月～2014年12月までに寄贈された311点です。ご寄贈下さった方の『思い』を尊重し、今回は全寄贈品を展示しました。展示は、軍隊生活、国民生活、書籍、地図、写真、郵便・新聞、その他の7つのコーナーに分けて行いました。

展示品の中には戦時下に発行された中国や世界の各種の地図、寄贈者の父親や職業軍人として軍隊生活の中で使っておられた衣服や各種の書類、戦中から戦後にかけて発行された雑誌「中央公論」(42冊)があります。寄贈品展は寄贈された『資料』を整理し、それを市民の皆さんに公開することを目的としています。

戦後71年が経過しましたが、今回は300点を超える展示で見応えもあり、戦時中の品々から戦争の実態に触れる機会として好評を博しました。見学者は186名でした。



「戦争の中の子どもたち」と「戦争と動物たち」展

1月17日(火)～2月4日(土)

小、中学生の来館者数が多い秋から冬にかけて「戦争の中の子どもたち」展を開催しています。戦時下の子どもたちの暮らしや学校での生活の様子を見て、平和の大切さを知ってもらえたらという意図です。

昨秋から今冬に『この世界の片隅に』というアニメ映画が話題となりました。戦争を伝える作品ではなく、戦争のある日常を伝える作品であることが若者に共感を与えたようです。

戦時下であっても、子どもたちはちゃんばらごっこやめんこ、ままごと、縄跳びをして遊んでいましたし、戦車や飛行機の絵を夢中で描いたりもしました。このような楽しい日常の生活を断ち切ってしまうのが戦争なのだという切り口で子どもたちに説明したら、少しは理解してもらえるのではないかと思います。戦争は始めるのは

簡単だけれど、止めるのは難しいと言われていきます。いつまでも今の平和が続くようにするためには自分たちはどうすればよいかを考えてもらう場所でありたいのです。

◆関連イベント

「金城学院中学3年E組 平和教室 ～東山動物園のぞうはどうして生き残ったのか」

1月28日(土)

文化祭で取り組んだ「ゾウ列車」をテーマにした平和学習を生徒が発表しました。



名古屋空襲から72年～犠牲者追悼の夕べ

3月11日(土)

軍需工場への空襲から始まった名古屋への米軍による空襲は、1945年1月から市街へと広がりました。とりわけ、3月12日・19日、5月14日の大規模空襲では2千人の死者、32万人を超える人々が罹災しました。

「ピースあいち」では、毎年空襲犠牲者追悼の夕べを3月に行っています。今年は3月11日午後5時から開催しました。第1部は、緑風の会による「朗読と歌～戦争の

時代を見つめて・Ⅲ～」、名古屋空襲手記「火の雨」、広島原爆体験長編詩「慟哭」などで構成された朗読と南山国際中学校生徒による歌。第2部は「ピースあいち」平和地蔵

前にボランティア手作りのともし火を並べ、建昌寺住職による「ともしび法要」が行われました。



2016年度語り手の会の活動・来館団体の状況

ピースあいちへ遠方からの来館者が増加

2009年度に始まった「ピースあいち語り手の会」の活動も8年目に入りました。本年度は従来の3つの柱の事業のほか新たに、2015年7月に開館した「愛知・名古屋戦争に関する資料館」から依頼を受け、8人の語り手を派遣しました。

1) 平和学習支援事業

戦争に関する資料館運営協議会(愛知県・名古屋市で設置)から受託して、愛知県下の小中学校を巡る事業で、本年度は名古屋市内4校のほか、田原市、豊田市、稲沢市など愛知県下の小学校8校で実施し、1013人の児童・生徒らが聞いてくれました。

2) 夏の戦争体験を語るシリーズ

8月2日から14日までの間に11回開催し、聴衆は総勢565人に上りました。

3) 「愛知・名古屋戦争に関する資料館」夏休み特別企画事業

8月6日から23日までの間に8回開催し、聴衆は123人に上りました。

4) その他の活動



上記のほか、愛知県下の小中学校や各種団体からの要請に応じて語り手を派遣したり、「ピースあいち」を訪れた学校・団体に対しても語り事業や館内ガイド事業を行いました。

こうした活動を通じて戦争体験者の語り事業は延べ79回、聴衆は総勢3473人に達しました。また、館内ガイドを行った団体・学校は55団体・1810人に上りました。

本年は愛知県内はもとより、大阪のほか長野、静岡、岐阜、三重など遠方からの来館者が目立ちました。

【生徒の感想】

戦争体験者の話を生で聞くことが、そしてその話を周りの人に伝え、後世に伝えていくことがどれくらい大切なのか、あらためて痛感しました。なかなか体験者の方の話を聞く機会はないので、今回(長崎)の修学旅行でしっかりと学んでみたいです。(中学2年女子)

10周年募金へのご協力をお願い

「ピースあいち」10周年の節目にあたり5月から約半年間、目標額1000万円で募金活動を行います。資金の使途・目的は、①建物の傷みの補修・不具合箇所の改善、②ホームページのスマホ対応等のリニューアル、③経過・到達点を記録する10年誌の刊行、④記念イベント開催、⑤今後の10年も強く明るく活動ができるような財務体質確保です。みんなで知人・友人のご支援の輪を一層広げ、「ピースあいち」の基盤を固めましょう。ご協力をお願いします。

映像による学習会 映画上映とトークの集い 3月18日(土)

上映作品：『究極の望み 核時代の終焉』(40分)
トーク解説：高橋博子さん・明治学院大学国際平和研究所研究員(客員)

今回は、核廃絶のための論文・出版に尽力されている研究者である高橋博子さんに解説をお願いしました。



ボランティア勉強会

1月22日(日)

昨年行った2階常設展示のリニューアル(展示資料の再検討・入れ替え)を受けて、ボランティアの勉強会を開催。「愛知県下の空襲」は「防空法」が国民生活にもたらした影響という視点で資料を整理、もっとも入れ替えの多かった「15年戦争の全体像」はパネルと資料が合わせて見られるように工夫、「戦時下の暮らし」は展示品を整理し風船爆弾作りなど新しい視点も盛り込んだなど、展示に関わったボランティアが解説しました。展示に対する熱い思いが伝わってきて、一時間半余りずっと立ったままの講座でしたが、ボランティアは時のたつのも忘れて熱心に聞き入っていました。



資料館探訪 18

死者の心臓の音が聞こえる サラスピルス収容所跡

ラトビアの首都リガの郊外、針葉樹林の中にナチスのサラスピルス捕虜収容所があった。当時の建物はすべて取り払われ、跡地には石が積み上げられ奇妙な建物が建っている。石壁に犠牲者の数が年別に刻まれている。1点が10人を表わし、犠牲者の数が一目で分かるようになっている。この収容所ではユダヤ人やソ連市民10万人(異説もある)が殺害されたという。

横に小さな資料館があり、中には、当時の資料や写真が陳列されている。資料館のゲートをくぐると、緑鮮や

かな草地が開けている。そこが収容棟のあったところで、広い空間の中央に巨大なモニュメントが建っている。必死になって立ち上がろうとしている男、こぶしを天に向けて怒っている男等。

「カチ、カッチ」という金属音が響いてくる。一瞬幻聴かと思ったが、それはまぎれもなく草地から聞こえてくる。死体処理室の在ったところにメロノームが埋め込まれ、死者の心臓の音を表わしているとのことであった。(N)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ぜひ「ピースあいち」の会員に!

2017年5月には、開館10周年を迎え、戦争と平和の資料館として、社会的にも期待されつつあります。そのような中で、10周年行事の第一弾として「原爆の図と原爆の絵」特別企画展が始まると共に「私にとっての平和とは?」という投稿募集もスタートしました。

「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は951名(正会員348名・賛助会員603名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,280万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

当館は設立10周年を迎える。発足当初は当面の仕事をこなすだけで精一杯であった。それが試行錯誤の歳月を重ねるなかで長期の企画ができるようになった。

この間、数多の企画展と多彩なイベントを開催している。それは90人余のスタッフ、ボランティアの優れた企画力と幅広い人脈がもたらしたものである。企画展のたびに新たなチームが生まれるが、日常的には総務委員会をはじめイベント班、ボランティア班、広報班、資料班、編集委員会など12のチームが平和運動を進めている。正会員・賛助会員の1000人確保と財政基盤の確立が今後の課題である。(S)